

『時間の比較社会学』

真木悠介 著 岩波現代文庫 1,760円(税込)

「時間のニヒリズム」というアポリア

会員 齋藤 賢 (77 期)



「真木悠介」という名前は、見田宗介氏のペンネームである。著者は、20世紀後半から21世紀初頭にかけて活躍した日本の社会学者であり、多くの社会学者に影響を与えた。その理由は、著者が東京大学の教養学部で教鞭をとり、多くの学生たちを魅了したからである。魅了された学生たちは、その後、社会学者になっていった。

本書は、1981年に上梓された一冊である（文庫化は、2003年）。この本の主題は、その名の通り、「時間」である。著者は、本書において、「時間のニヒリズム」という問題に挑む。すなわち、「個人の生も人類も永遠ではない」という気づきがもたらす「死の恐怖」と「生の虚無」という問題に取り組んだのだ。

はっきり言ってしまえば、本書には、その問いに対する説得的な答えは書かれていない。本書を読んでも、「時間のニヒリズム」から解放される方法はわからない。しかし、それでも、本書は、圧倒的に魅力的なものである。それは、本書が、カタログ的な面白さと衝撃的な方法論を備えているからである。

本書は、さまざまな社会の時間意識を紹介する。当然、現代社会の時間意識が登場する。それだけではなく、近代社会が始まったばかり頃のヨーロッパ社会の時間意識も登場する。また、アフリカのカムバ族の時間意識、古代ギリシャの時間意識、古代日本の時間意識も登場する。時間意識というテーマを据えて、世界中の社会を総覧する。この感じは、まさにカタログ雑誌のようである。そして、それらを読んだ私たちは、近代ヨーロッパの時間感覚に共感し、古代ギリシャの

時間感覚に感嘆し、カムバ族の時間感覚に驚愕する。

本書のもう1つの魅力、それは方法論である。普通、ある問題が生じた時には、その問題の解決方法を考える。弁護士の仕事も、法律問題が起きた時にどうやって解決するのかを考える仕事といえる。

著者は、本書で真正面から問題に立ち向かうのではなく、前提に遡ろうとする。すなわち、ある問題がまさに「問題」として立ち現れる条件を明らかにしようとする。前述のとおり、著者は、本書において、さまざまな社会を検討する。さまざまな社会を検討することによって、我々が自明視している事象が、実は、全然自明ではなく、ある社会条件を前提としてはじめて生じる問題であることを明らかにするのである。

そうした方法論によって次のことが明らかとなる。確かに、近代精神は、「時間のニヒリズム」から逃れられない。しかし、「時間のニヒリズム」は、普遍的な現象ではない。我々の時間意識を前提にして、はじめて生じる問題なのである。

こうした知見を得ること、つまり、「時間のニヒリズム」という苦悩が存在しない社会がありうることを知ること、それらによって我々は解放の可能性を感じることができる。

弁護士は、忙しい。忙しいとき、死の恐怖や生の虚無といった観念的な問題は忘却される。しかし、ちょっと落ち着いた時、逆に忙しすぎてどうしようもなくなった時、そうした観念的な問題は、あなたの前に立ち現れるかもしれない。そんなとき、本書を手にとってみるとよいかもしれない。